コミ・プラ
マスコットキャラクター
『ホッホ君』

公民館
インスタグラム

ふじみ町 公民館報

No.744
令和８年１月１日

〒399-0211
長野県諏訪郡富士見町富士見 3597-1
コミュニティ・プラザ内　富士見町公民館
Ｅメール：kouminkan@town.fujimi.lg.jp

発行　富士見町公民館
編集　公民館報編集委員会
TEL 0266(62)7900
FAX 0266(62)7611

節分の行事「十二書き」

十二書き
制作再現

十二書き
飾り付け

十二書き
焼頭

諏訪市博物館で開催された「十二書き」再現写真の展示

高原晴雨

「冬を重ねる」

もうすぐ、富士見町に住み始めてから五回目の冬を迎える。移住する直前、すでに数年前から町で暮らしていた友人の自宅で、年越しをしたことがある。東海地方の温暖な地域で育った私は、周りから寒がりの太鼓判を押されていたのだが、やはり富士見町の冬の厳しさは衝撃的だった。ある朝、友人が鶏小屋の中にあるバケツをひっくり返し、大きな氷の塊を庭先に放り投げた。それは夕方になっても全く溶ける気配がなく、翌日も同じ場所で綺麗に同じ形を保っていた。数日同じことを繰り返していたからだと思うが、庭先にはバケツ型の氷の塊がいくつか転がっていた。私はそれを眺めながら、これから未知の場所に暮らすのだと、静かに覚悟した。

夕暮れ時、冷えて澄みきった空気の中で、グラデーションの空を背に南アルプスや八ヶ岳が静かに佇んでいる。その光景にハッとして言葉を失う感動がある一方、自分が生きている世界とは全く関係のないものに感じていた。一緒に年越しをした友人を介して富士見町に惹かれ、移住を決意したものの、当時は都会の真ん中で、日が暮れていく空を眺める余裕もない生活をしていた身には、この土地の空気や景色は、まだ、まるで違う次元のものに感じられた。

ありがたいことに、子育てに、仕事に、家事に、今でもとても忙しい時間を過ごしているが、あの頃の都会の街が「異世界」に見えるようになってしまった。私の寒がりの評判は相変わらずだが、二歳半になる息子は日が暮れても外で遊びたいとよく泣きじゃくる。ちなみに、昨年から自宅の庭で鶏を飼い始めた。夫が冬場の飲み水の凍結には細心の注意を払ってくれているので、今のところ、庭先に氷の塊はまだ現れていない。

東京の街は今頃、ネオンで溢れているだろう。その美しさも華やかさも、よく知っている。けれども今は、だんだん暗くなる空の変化を静かに眺める時間こそ、何よりの贅沢に感じている。私はこの町の冬の時間が、大好きである。

揚妻　のはら

特集

「十二書き」を知っていますか？

公民館報に取り上げてほしいことを募集したところ、「節分の行事としての『十二書き』について」のお問い合わせがありました。初めて聞く言葉に興味を持ち、「十二書き」について、調べてみることにしました。

「節分」とは

現在私たちが使用している新暦は、太陽を基にした「太陽暦」（グレゴリオ暦）です。1年を365日とし、地球の公転周期との誤差を調整するため、4年に一度、2月29日（閏日）を設けています。

明治6年以前に、使用されていた旧暦は、月（太陰）と太陽を基に作られた「太陰太陽暦」でした。月の満ち欠けの周期を基準にしていたため、1年は354日となり、地球の公転とはかなりの誤差が生じるため、19年に7回は13番目の月（閏月）のある年を設けて、1年を384日とする複雑な暦でした。

これとは別に、農事のために、太陽の運行を基に作られた季節の目安として、「二十四節気」があり、現在でも生活に結びついて使われています。

この二十四節気の中で、季節の始まりとされる立春、立夏、立秋、立冬の前日は、すべて節分（季節の分かれ目）とされていました。

旧暦では立春の時期に元旦を迎えるので、春でもないのに今でも年賀状に「迎春」や「新春」と書くのは、このためです。そして、新年を前にした特別な日であることから、特に春の節分を重んじるようになったようです。

新暦での立春は2月4日が多いので、節分は2月3日とされていますが、年によって、前後一日の変動があります。これは、地球の公転周期の微妙なずれによるもので、ちなみに昨年の令和7年は、一日早く、立春が2月3日のため、節分は2月2日でした。

節分の行事の始まり

季節の変わり目には邪気が入り込みやすいといわれ、特に立春の節分には魔除けの行事が行われるようになりました。これは奈良時代に中国から伝わり、宮廷で年中行事として行われるようになった「鬼やらい（追儺）」の儀式が始まりといわれています。

宮中で行われた追儺の儀式は、陰陽師が祭文を読み上げ、方相氏という役人が四つ目の恐ろしい面をつけて疫鬼を追い払う役をしました。盾を持ち、矛を打ち鳴らして大きな声を上げました。これに、桃の弓と葦の矢を持った役人たちが従い、矢を放ち、鬼が嫌う桃の枝を地面に打ち付けて鬼を追い払いました。今でも京都の平安神宮では、毎年再現して行われています。

「方相氏」

日本では古来、豆や米には霊力が宿るとされ、これらをまいておはらいをする慣習があり、室町時代以降は炒った大豆をまくようになり、江戸時代には庶民にも広がりました。

豆は「魔（ま）を滅（め）する」に音が通じるため、豆の力を用いて「鬼は外」「福は内」などと唱和することで魔を滅するとされています。生の豆は芽を出して縁起が悪いので、炒った豆を使います。節分の豆は「福豆」や、「年取り豆」とも呼ばれ、自分の年と同じか、一つ加えた数の豆を食べ、健康や幸せを願いました。

その他の節分のならわし

〈やいかがし〉「焼き嗅がし」という意味で、焼いた鰯の頭を柊の枝に刺し、門や家の軒先につるして、魔除けのおまじないにします。柊のトゲが鬼の目を刺し、鰯のにおいで鬼が入らないとされ、「鰯の頭も信心から」ということわざの由来になっています。

〈福茶〉自分の年齢ほどたくさんの豆を食べられない場合に、年の数の豆に熱いお茶を注いで飲めば、食べると同じご利益があるというものです。

〈恵方巻〉恵方（その年、おめでたいとされる方角）を向き、切っていない太巻き寿司を無言で「丸かじり」します。

「十二書き」とは

新年の季語にもなっていて、一般的には、小正月（正月15日）に飾られる割り木で、新年の豊作や吉兆を占うための飾り物のことを指します。

割り木の内側に1月から12月までの文字や12本の線を記すことで、各月の安泰や豊穣を祈りました。「新木（にゅうぎ）」とも呼ばれ、古くは豊作を祈願する正月行事の一環として、特に、農家や富裕な家で行われた風習です。

長野県では、南信（上伊那・下伊那）から中信に広く伝わっていました。

諏訪地方での「十二書き」

一方、諏訪地方から東筑摩地方、南北安曇地方と木曽北部にかけては、節分の行事として行われていました。

「鬼の目」ともいい、割り木（薪）に、囲炉裏の燃えさしや消し炭で、平年は13本、閏年は12本の横線を書き、門口や戸口の両側に立てておきました。鬼を騙すおまじないで、平年に鬼が戸口まで来て中に入ろうとして、これを見たとき、「今年は平年で12ヶ月なのに、13本はおかしい」と数を数え直しているうちに夜が明け、家に入ることができないというもの。閏年の12本も、数え直している間に夜が明けてしまうというものでした。（12本と13本の数が、何故か逆の地区もありました。）

また、一般的に「やいかがし」と言われているものは、「焼頭（ええかがし）」や、「虫焼き」等と呼び、ごまめや鰯の頭を萱（かや）の串に刺して焼き、「十二書き」と一緒に戸口に飾った家もありました。

鬼の目の十二書きと串刺しの鰯の頭

富士見町では、集落によっては、一日早く行っていた所もあるようです。

割り木の入手が困難になってからは、短冊用の紙に「鬼の目」を墨で書いて、玄関に貼り付ける家も多くなったようです。

大平在住の日野さんによると、「祖父が元気な頃には薪を割ってやっていて、どこの家でもやっているものだと思っていた」とのお話で、昭和40年代までは行われていたようです。

現在ではほとんど行われなくなり、知らない人も多いのですが、今でも続けられている方がいらっしゃいます。

若宮在住の田中さんは行事や風習を大事にする家に育ったので、父親の影響を強く受けられています。白い紙を短冊にして、鬼は両手の指の数までしか数えられないから、10本より多い12本の横線と、その下に片目も書いて、玄関に飾っているそうです。

「十二書き」の再現・継承

昔ながらの風習は行われなくなると、次世代に継承されることが危惧されます。

〈諏訪市博物館〉

伝統文化を貴重な民俗行事と捉え、「市民に少しでも知ってもらえたら」と、令和2年に初企画として、玄関両脇に解説付で置いたそうです。

鬼惑わせる「十二書き」再現
諏訪市民新聞（令和2年1月31日）

令和4年2月1日から3月13日まで開催された「すわ大昔ミニギャラリー展　諏訪の年中行事－春の行事－」では、「十二書き」再現写真の展示（公民館報表紙写真）もありました。

〈井戸尻考古館〉

『富士見町史下巻』の作成時に、「十二書き」に触れたことから、町内に伝わる風習を残していこうと、節分の行事として、玄関に飾るようになりました。毎年欠かさずではありませんが、今年令和8年も飾る予定でいるとのことです。

井戸尻考古館の十二書き
（令和6年）

あとがき

風習というのは、地域により、また口伝えのため、様々に変化していくものだということに気づかされました。

「十二書き」が「鬼の目」とも呼ばれている理由にはたどり着けませんでしたが、「鬼の目を惑わす」ということのようです。線だけでなく、鬼の顔や目玉を書き加えるのは、富士見町だけのようでした。

富士見町全地区での風習を調べ切ることはできませんでした。「十二書き」について知っている方や今でも続けている方がいらしたら、ご一報ください。

山口　美佐子

［取材協力・資料提供］
諏訪市博物館
井戸尻考古館
茅野市　三好 祐司さん

［参考資料］
『長野県史 民族編 第五巻　総説Ⅱ』
『信州の年中行事と食』
『12ヶ月のしきたり』
『日本の祝日と歳事の由来』
『暮らしのならわし十二か月』
『富士見町史 下巻』
『富士見村誌』
『高原富士見 ふるさとの語り草』
『ひじろ端から』
『諏訪市年中行事調査発表録（四賀・豊田・湖南編）』

公民館からのお知らせ　富士見町の新たな魅力、“地元カタン”で発見！

私たち「地元カタン」は、町公民館企画講座で開催したボードゲーム「カタン」で町民の皆さんと交流しました。このカタンを通じて富士見町の魅力を再発見し、世代を超えた交流を生み出す活動をしています。さらに、子ども達が知っている大人が増えると、登下校中のセキュリティにもつながり、大人たちも子どもが歩いていたら、見守りしちゃいますよね。民間では日本初の取り組みとして、カタンのメーカー GP 様、富士見ロータリークラブ様の協力のもとワークショップを開催中です。教育機関以外では日本初の取り組みです。暖かく見守っていただけると嬉しいです。

お知らせ　１月24日（土）午後1時から5時まで「コミュニティ・プラザ」で「カタン会」を実施します。カタンってなあに？と思ったあなた、ぜひ遊びに来てください！

@JAMPOPO_BG

富士見町図書館　☎62-7930

開館時間：通　常 … 午前9時30分～午後6時
火曜日 … 午前9時30分～午後7時
https://www.town.fujimi.lg.jp/site/library1/

おすすめ Book

★電話・WEB または
カウンターでご予約ください

小説『アフター・ユー』

一穂　ミチ 著

タクシー運転手の青吾の元に、恋人･多実が『見知らぬ男性と五島列島で海難事故に遭い、行方不明になった』という知らせが届く。
謎の多い事故の真実を求めて、男の妻だという沙都子と五島列島の遠鹿島へ向かう。恋人の人生のかけらを拾い集める旅は、青吾自身の過去をも照らしながら、思いも寄らぬ場所へとふたりを導いていき･･･。
喪失を通して愛を問う、恋愛小説。

イベント情報

●図書館上映会「アイラと雪の女王」

日　時：１月31日（土）
　　午後１時30分～２時45分
会　場：コミュニティ･プラザ ２階　AVホール
定　員：60 名（小学生未満のお子さまは保護者同伴）
入　場：無料（申込不要）

問 富士見町図書館　☎62-7930

1 月						
日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

- 図書館・博物館…休館日
- 図書館のみ…休館日（博物館は開館日）
- 20 冊貸出　※毎月第３日曜日は「家庭読書の日」

富士見町図書館HP

博物館（富士見町高原のミュージアム）☎75-5735

印刷・複写不可
招待券
博物館企画展

企画展

『キツネの眼が問いかけてくる
ー富士見と河西養狐場の時代ー』　北條 勝貴（上智大学教授）

期間：令和８年１月24日(土)～３月22日(日)

- 場　　所　富士見町高原のミュージアム（コミュニティ・プラザ２階）
- 開館時間　午前 10 時～午後５時（入館午後４時 30 分まで）
- 休 館 日　月曜日（月曜が祝日の場合は翌日）　祝日の翌日（土日祝の場合は開館）、12 月 28 日～１月４日
- 入 館 料　大人 300 円、子ども 150 円　諏訪地域の小中学生は無料

➡右上の招待券を切り取ってお持ちください。町内１家族まで無料にてご覧いただけます。